

声を出し、成長する

サークルはやし 宮本哲

声を出す

学校に来て声を出す場面は多々ある。

①挨拶

②音読

③友だちとの会話

など様々な場面で声を出している。③は、どちらかと言えば、子どもたちは主体的に声を出している。最近では、うまくコミュニケーションを取れない子どもが増えてきているようだが、ここでは①と②についての学力づくりや授業づくりの方法や実践を述べていきたいと思う。

①挨拶

挨拶は、一見すると、授業づくりや学力づくりとあまり関わっていないように思えるが、私は大きく関係していると考えている。

「お早ういびいします。」

と言って朝一番、大きな、明るい声で教室

に入ってくる子は、授業中や委員会やクラブなど、どの学校生活の場面においても積極的に発言する子が多い。

これは、家庭と学校での言動の切り替えがしっかりでき、公私を分けることができているからだ。休み時間と授業時間の切り替えも早い。

また、目を見て挨拶することは、相手を認め、信頼関係を結ぶ第一歩になる。信頼がある学級は、自分の意見をのびのび言える雰囲気がある。

このように挨拶がしっかりできる子が増えれば、学力形成に大きく関わってくる。それでは、今までに私が行ってきた方法を述べていく。

(ア) あいさつ勝負(担任教師対子ども)

ルール・・・先にあいさつした方が勝ち。期間・・・一週間

対決を始める前日にルールや期間などを説明しておく。(出来れば金曜日がいい。月曜日は子どもたちが休日モードから切り替わっていないため忘れている子が多い。)そして、

「先生には、あなたたちのレベルでは勝てません。」と言うようにやる気を引き出しておく。

いざ初日。この日は絶対に教師が勝たなければならない。そのため、柱の陰、ドアの後ろなどいつも教師がいらないところに隠れていて不意を衝く。俄然、二日目からは、子どもたちのやる気が違ってくる。教師が隠れていそうなところを警戒しながら登校してくる。しかし、同じ方法は取らず、教師は遠くから大声で挨拶する。三日目以降、子どもたちは、いろんなところに注意しながらも大声で挨拶する用意をしておかなくてはならない。

このようにゲーム性を取り入れて楽しみながら挨拶する習慣をつけていく。次の週からは、学年の教師、高学年の教師と広げていく。さらに、隣の席の友だち、班の友だち、班対決など広げることも可能である。

(イ) あいさつリレー

あいさつリレーは朝の会の時に行く。司会の日直から始める。「お早うございます↓お早うございます。↓お早うございます↓・・・」と順番に続いていく。そして最後に全員で「お早うございます。」この時のポイントは一つ。全力で挨拶しているかである。全力とは、声の大きさ、口の開け方、目を見開いているか、全身を使っているか、などそれぞれが自分の力を発揮しているかがポイントである。

しっかりと出来ていないときは教師の指を一本立てる。この合図が出たときは二順目が始まる。このように全力でないときはずっと続くのである。

このあいさつリレーは、いろんな声出しで使える。返事、帰りのあいさつなど声を出させたい時にする。今年の運動会では「南中ソーラン」をしたが子どもたちから朝の会の際に「どっこいしよリレー」をしたいと提案してきた。毎日するので子どもたちも大きな声を出すことに抵抗がなくなり自分の声をしっかりと出すことに気持ち良さを感ずるようになる。

②音読

文章を読むというのは、全ての学習の基礎である。文章をスラスラとなめらかに読むというのは、学習理解のはじめの一步である。だから、口を大きく開け、はっきりとした発音で腹から声を出し、聞いている人が聞きやすい音読ができるようにしなければならない。そのために私がしているいくつかを紹介する。

(ア) 題名の横に○を十個書く

一回読んだら、○を一つ塗る。授業中、休み時間、給食時間、家庭など、どこで読んでもいい。とにかく、一度読んだら一つ塗る。○が足らなくなったら付け足してもよい。ポイントは、読んだ数を毎日確認してあげることである。国語の時間でもいいし、朝の会でもいい。とにかく毎日、何回読んだのかを確認し、たくさん読んだことや昨日よりも増えている子を誉めることである。

低学年は、文章が短いこともありすぐに百近く読んでくる。そして、暗唱をする子が増えてくる。さすがに高学年は、暗唱とはいかないが、音読の宿題を出すだけの時よりも確実に自分から呼んでくる子が増える。

える。

(イ) 連れ読み

教師が先に読み、その後と同じところを子どもたちが教師のまねをして読む。はじめは、ゆっくりから徐々にスピードを上げていく。一回に読む量もはじめは少なく徐々に長くしていく。子どもたちの実態に合わせてスピードや読む量を変えていく。

慣れてきたら教師役を子どもがする。読み手の子どもが順番に代わりながら班で順番に連れ読みをしたり、全員で列順に連れ読みをしたりしていく。当然、自分の読むところには責任がついてくる。教師は、上手に読めている子、昨日よりもよくなった子を誉める。

(ウ) 音読テスト

音読テストは、一回じゃなく何度もする。朝休みの時間、授業が早めに終わったとき、給食の時間など隙間時間を見つけて何度もする。読む量は、少なくともいい。とにかく教師が全員の音読を聞き、評価する。そして、アドバイスと良かったところを誉める。この個別での対応が子どもたちの自信ややる気につながる。